

## 可觀小説卷卅二

一、寛文元年の豊熟

寛文元年辛丑至て豊熟の年也。參州の稻長さ八尺、駿州久能榑原越中守領内より、稻に枝あるを江戸へ献す。本より一尺八寸に枝三つあり。一の枝の穂に百七十粒・二の枝に百十七粒・三の枝に九十三粒あり。又富士山の麓に方三町の田地あり、其田中にも穂に有穂と云。今年惣様の藁の長さ五尺二三寸。

一、北海漂流綺談

勢州松坂七郎兵衛と申者の船頭、水主凡十四人、外に一人は紀州の<sup>頼良公</sup>より江戸へ廻米上乘の者と十五人、庚子、十二月二十三日志州鳥羽を出船の所、俄に北風烈敷吹出、遠州新居上、片濱中と云所に船をかけ留。二十四日朝西風に成り少和ぎたる故、懸塚前迄走候處に、又其晚より北風に成候て舵をも吹折れ共、代舵指替る事もならず、二十五日朝漸く代舵をさし候。此時米二百石餘はぬ申候。猶風烈故晝夜九日の間、辰巳の方へ吹き行。九日目に風鎮り、そよ〜

と西に吹替候へば日下へ流され、其後は寅卯の方を指て、七月十五日迄吹流され候事。

翌辛丑三月末つかたより七月半迄、日月の光を不見して有り。其内二三度幽に少の内見え候得共、霧深して又もとの如くに成申候。左候て七月二十五日に大き成岩に乗懸候に付、碇を懸留候得共、其綱を岩の角にて摺切候故、はし舟に乗り磯邊へ上候へば、白眞砂の有處に水流出候。其川端に苫屋二軒御座候。其屋の内に入三人居候が、我等を見候て一人は何方へ哉らん參候て、三日過罷歸候。其後間もなく方々より人集り候。其所に十二日居申内に七十人許に成申候事。

衣類は膚に獸の皮を毛の方を内へして綴合、細袖にし着之、其上着に熊の皮を縫合、毛の方を外にして着申候。但常の如く前合に仕候事。

男の長、高さ日本の大抵の人よりは七八寸程高して、耳には白銀の環を付申候。髪は肩の通にて揃候て禿にて御座候。鬚は成程長く御座候事。

男女の物言聞わけ不申候。尤此方から申事をも聞知不申

候。七十人程の内に、女は二人相見え申事。

我等共濡着物を十許干置候へば、皆嶋の者共取候間、追懸とめんと仕候得共、弓にておどし候故、其通にして置申候。其後嶋人寄合申が、何と談合申候哉らん、獸の皮六枚船の内へ投入候得共、船中にては皮類を忌申候故返し候へば、又弓にておどし候故取申候。

其嶋人共は何れも弓を持申候。弓の木を蝦夷にて承候へば、とろふと申木のよしに御座候。木のなりは丸くして跡先を細く致し、長さは四尺許に見え申候。殊の外強弓のよし承候。箭には木をけづり、木の兩方よりあて候故四羽に成申候。根は大形竹にて御座候事。

脇刺は白鞘也。一尺四五寸に見え申候。れんじやくの様成物を以、首に掛申事。

右の獸の皮、歸路の節蝦夷のとかしと申所にて、松前殿御家來田中平兵衛・津田七郎左衛門と申人改被申候て、此皮はとどらつこと云皮也。依之出し申事法度の由にて御留候。右御兩人衆は蝦夷に一揆起候とて御越候事。

草も此方のと替不申候。乍去何も大きに御座候。山吹など

は三尋許宛御座候。いたどりは二丈餘も御座候。竹の様に見え申候。百合草の花殊の外大に御座候。其外大木共澤山に御座候。大形は皆とろと申木にて、葉はけやきの少しひさく御座候事。

鳥類此方のに替不申候。然共鴉・鶯・鷓は大に御座候事。狐は此方よりは取分大に御座候。鹿は蝦夷より其方には無御座候事。

海にはとどらつこと・鯨多く御座候。何も弓にて射申候て、其後もりの様成物にてとめ申候。川には鱒多く御座候。汐干には手捕に仕候由。

不斷食事は鳥獸ばかり食申候。米を爲見候へば知不申事。

雪不斷消不申候。其故か水殊の外つめたく御座候。我等共上り申所より嶋人の在所へは、往來三日路に御座候。若存命にて罷歸候へば物語と存じ、跡をしたひ參候へば、頻に手にてつき戻し候。猶無理に參らんと仕候へば、又弓にておどし候故、何も罷歸候事。

江の嶋津ぶとの嶋は、磯傳に船にて參申候。行程十二三里